【ねがいましては】

平成２５年１１月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２７７号

「同調圧力」

ある日のラジオからなるほどというような四字熟語が流れてきました。同調圧力。

西欧諸国に比べて、日本はとくにこれが強いということです。学校現場に目を移してみると、皆、スマートフォンを持ち始めると、自分だけ取り残されたような気になってしまったり。ある種のアニメがはやり始めると、そのことに熟知していないと仲間はずれになりような気がしてしまったり。ゲームなどでも、今最も流行っているゲームを持っていないだけで孤独感を覚えてしまったり・・・。

これは子どもたちの世界に目を持っていったときのことです。では、お母様方の世界ではどのような同調圧力があるのでしょう。お子さんが成績優秀であること。落ちこぼれでもしたら世間様や親類などに偏見をかってしまわないか。大卒までいってくれないと、やはり周りの方々に顔を合わせられない。そして名のある企業に就職浪人せずに内定がとれること。

これ皆すべて、前回、前々回に取り上げた周りへの意識がもたらすものだと思います。それによって、目に見えないさまざまな亀裂が生じます。特に親の期待をずっしりとしょって日々生活する子どもたちには、気持ちの安らぐ暇がありません。常に親の感情に気を止め、今日は叱られないか、明日は叱られないかと、不安な毎日を送ることになります。

小さい頃から、「いい子だね」と、周りからいわれながら育ってきた子ならなおさらです。どのような精神的圧迫があってもいい子でいなければなりません。

最近、世界の教育について調べることがありました。すると、欧米では「個」を大切にする教育が一般的なのに対し、日本や中国などアジア圏の国々では、「一斉」が主なのだそうです。その理由として、欧米よりも後発であった日本は、明治維新とともに欧米に追いつけ追い越せとばかりに、大勢の子どもたちを教室に詰め込み、知識習得優先の教育を行ってきました。覚えれば点が取れるというわけです。そして成績に競争原理を持ち込むことで、教師はあまり努力をしなくても大勢の子どもたちを受け持つことができたわけです。

その中で時間をかけながらいつの間にかできあがってしまった同調圧力が、「成績優秀は良い」というものです。

今の中国がまさにかつての日本に近い状態であると言えそうです。韓国もその例に漏れません。学歴主義。良い成績を取っていなければ、この先の人生は真っ暗闇。良い大学を出ていなければすでに人生は終わったも同然、などのような心理は、学校現場に放り込まれたときから、競争の渦の中でおぼれそうになりながら生きてきた子どもたちの末期的な感情なのかもしれません。きっと彼らが口々にする言葉・・・安らぎって何ですか・・・安心って何ですか・・・。

ではそのような感情を抱かざるを得なかった原因を学校のみに絞っていいのでしょうか。そこから大きなダメージを受け、生きてやるぞという力を失ったお子さんに救いの手をさしのべなければならない最大の存在は・・・。

家族。生まれたときからずっと心のよりどころであった家族が、いつのまにか成績成績と、隣に寄り添うことをやめてしまったら、子はどのようにしてつらい気持ちや悲しい気持ちを癒やせばよいのでしょうか。やってくるのは孤独感のみ・・・。ひとりぼっちを紛らわせるための携帯、スマホ・・・。見つかればまたブツブツ言われてしまう。

西欧では教師は教壇に立つことなく、ぐるぐると教室内を歩き回るそうです。生徒たちはそれぞれの目的に集中しているだけ、その際に出てきた質問をぶつけたり、取り組み方のアイデアをアドバイスしたり。つまりサポート役に徹しているわけです。西欧では、幼少の頃から学びに対するモラルを徹底して教えるのだそうです。これは家庭内でのごくごく自然なしつけとして扱われます。授業中はしゃべらない。お話はきちんと聞く。など、最低限のことがしっかりと身についた状態で学校生活が始まるのだそうです。ですから、教師は今更のごとく、「静かにしなさい」とか、「こっちを向きなさい」などと言う必要がありません。高校現場では授業中に居眠りをするだけで不思議そうな顔をされてしまうくらいです。

日本ではそのような行為を防ぐために「内申に響きますよ」とか、「授業態度も成績に関わっているよ」などと、脅しにも似たようなことで授業を保とうとしているケースが多々見られるようです。

今の子どもたちを助けることができるのは、一番はやっぱり家族。学校で、しっかり先生の目を見てお話を聞き、おしゃべりなど全くしない。そんな毎日を送りながらもテストは「あれー！」・・・。すばらしいお子さんです。何がよくて何が悪いかをしっかりと自身で決定し、それを自らが力強く守ろうとしている姿。同調圧力に屈しないすばらしい生き様がそこに展開しています。

最近あった教室内の出来事です。小学校１年生の子たちがキャッキャッと騒がしくしていると、私が上級の子によく使う言葉に、「君たちが良くないと感じたのなら、君たちが動くべくだよ、それが助け合いだね。何も言わずにそのうち先生がしかってくれるなんて思っていたら、それって学校と同じに近くないかい。よく使うだろう、そんなことしていると先生に言いつけるよってね。そうではなくで、そう思ったら自分が動こうよ。」

そして学年上の子が「ほら、静かにしようね。」「・・・・・・。」先輩に言われた子は、これが効果覿面。とてもたいせつな光景。「ぼくも、わたしも大きくなったらあのような先輩になりたいな。」・・・・・ありがとね。